

東洋大学における学生生活の質および教員の大学改革・教育改革に対する意識に関する調査研究

著者	杉山 憲司, 斎藤 里美, 鈴木 哲郎, 小林 正夫
著者別名	SUGIYAMA Kenji, SAITO Satomi, SUZUKI Tetsuro, KOBAYASHI Masao
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	41
号	2
ページ	181-220
発行年	2004-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003152/



東洋大学における学生生活の質および教員の大学改革 ・教育改革に対する意識に関する調査研究¹

A Study of Research about Quality of Student Life and Professors' Attitudes towards Faculty Development at Toyo University

杉山 憲司

SUGIYAMA Kenji

斎藤 里美²

SAITO Satomi

鈴木 哲郎

SUZUKI Tetsuro

小林 正夫

KOBAYASHI Masao

目 次

- . はじめに
- . 研究1（学生生活の質と達成感・受容感の
関係について）
 - 1 . 調査の目的
 - 2 . 調査の方法
 - 2 - 1 「学生生活の質（Quality of Student
Life:QoS�）調査」票の構成
 - 2 - 2 調査対象者・調査方法
 - 2 - 3 結果の分析方法
 - 3 . 調査結果の概要と結論
 - 4 . 調査の集計結果とその分析・考察
 - 4 - 1 大学生生活全般にわたる生活の質に
対する意識（項目ごとの分析）
 - 4 - 2 学生生活の質に対する重回帰分析
 - 5 今後の課題
- . 研究2（大学教育改革に対する教員の意識
と行動 - 東洋大学における教員の意識調査
の結果から - ）
 - 1 . 調査の目的
 - 2 . 調査の方法
 - 2 - 1 調査対象および実施時期
 - 2 - 2 質問紙および質問項目の枠組み
 - 2 - 3 回収方法および母集団の性格
 - 3 . 調査結果の概要と結論
 - 4 . 各質問項目の集計結果とその分析
 - 4 - 1 教員の現状認識と期待する大学教
育改革の方向性
 - 4 - 2 教員の学生観、教員観、大学教育
観
 - 4 - 3 教員の大学授業に対する意識と授
業改善の工夫
 - 4 - 4 教員の大学コミュニティ（組織・
施設）観
 - 4 - 5 教員の力量形成の実態と期待する
条件整備
 - 4 - 6 大学教育改革に向けた教員の提案
 - 5 今後の課題

．はじめに

本研究は、東洋大学生の学生生活の質を学習面、友人関係面、それに、大学コミュニティにおける学生の位置づけなどに渡って明らかにしたいという問題意識から、旧社会学研究所プロジェクトとして研究がスタートした。新学科が発足して、次は学生の大学満足度を高めて卒業させることが課題であると考えたならば、現代の大学生にとって、学生生活の質はどのような要素から構成され、それに対して大学や教員はどのような形でそれに応え、学生の満足感や達成感を高められるであろうか。そこで、先ず、新入生と卒業を目前にした4年生の東洋大学生を対象としたグループインタビューを行い³、学生生活の質の調査枠組み(仮説)を生成した。このような手法を取った理由は、マスコミや受験産業が取り上げる大学ランキングが、必ずしも、教育の質や学習達成感に基づいた評価ではなく、それならば、教員が直接責任を持ち得る学習面に重点を置いた、学生生活の質(Quality of Student Life : QoSL)研究が必要と考えたからである。ここで生成された仮説枠組みは、a) 大学コミュニティ(運営組織)と関わる領域、b) 学習と関わる領域、c) クラブ活動と関わる領域、d) 友人・対人関係と関わる領域の4領域であり、この枠組みを基に調査票を作成した。他方、大学教育を直接担っている先生方についても可能な限り調査し、学生との比較において分析することとした。

．研究1 (学生生活の質と達成感・受容感の関係について)

1 . 調査の目的

研究フィールドとしての大学という視点から、学生生活の質(Quality of Student Life:QoSL)を測定し、総合評価としての大学満足度・学習達成感・友人による受容感との関係を分析することが目的である。この目的のために、学習領域と教員と学生の人間関係および相互の期待に重点を置いた「学生生活の質(Quality of Student Life : QoSL)」尺度を新たに作成・分析した。そこで、本研究の具体的目標は以下の2点である。

第1に、東洋大学生の 学習領域、 サークル活動・友人関係領域、 大学コミュニティ・施設立地領域などの大学生生活全般にわたる生活の質に対する学生の意識・実態を明らかにする。

第2に、上記の大学生生活の質に対する総合的評価として、1) 大学生生活に対する満足感、2) 学習活動に対する達成感、3) 大学生生活において自分が友人から受け入れられているとの受容感を測定し、これら3つの総合的評価と学生生活の質との関係について分析し、大学生生活の質を高める方策について考察する。

2．調査の方法

2 - 1 「学生生活の質（Quality of Student Life:QoSL）調査」票の構成

調査票は先行研究に基づいて、以下の3領域12枠組みで構成された。．学習（学問・知的探究）領域は7枠組み（1．学習全般、2．講義科目、3．演習（ゼミ）、4．外国語教育、5．スポーツ・健康教育、6．資格取得・就職・進学支援体制、7．図書館・情報環境）。．サークル活動・友人関係領域は2枠組み（8．サークル活動、9．友人関係）。．大学コミュニティ・施設立地領域は3枠組み（10．大学コミュニティおよび教員との関係、11．職員やOB・OGとの関係、12．施設・立地）の合計12枠組みで構成され、各枠組み7問、合計84項目。選択肢は1（全くそう思わない）、2（あまりそう思わない）、3（どちらでもない）、4（ややそう思う）、5（非常にそう思う）の5段階評定とした。これらに、総合評価としての学生生活の満足感、学習達成感、友人からの被受容感が加わる。更に、回答理由や要望などの具体的内容について問うSQ33項目、フェイスシート（FS）項目、及びこの調査そのものに対する自由記述意見で調査票を構成した。

2 - 2 調査対象者・調査方法

東洋大学生551名（8学部、男性257名、女性281名、NA13名）。調査は先生方に協力をお願いし、2001年11月～2002年1月の間に実施された。

2 - 3 結果の分析方法

1）第1の目的のために、仮説的な3領域12枠組みに基づいて学生生活の質に対する学生の回答の単純集計を行い、質問項目ごとに分析した。その際、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を選択した回答者の割合（％）を合計し、これをそう思う「肯定的」グループに、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を選択した割合を合計し、これをそう思わない「否定的」グループに再分類した。なお、「どちらでもない」は各質問に対して判断保留との考えから、以上の3グループに分けて分析した。2）第2の目的のために、学生生活の満足感、学習達成感、友人からの被受容感の3つの総合評価を従属変数、3領域12枠組み（係数を示した）に基づく学生生活の質に対する回答を独立変数とする重回帰分析を行った。

3．調査結果の概要と結論

3 - 1 学習（学問・知的探究）領域のQoSL

学習場面の構成要素は、第1に学生の積極性、自発性、第2に教員の教育に対する積極的な姿

勢・態度、第3に助手やTAなどの基本的な教学支援体制が考えられるが、授業そのものに限れば、双方向性、参加型授業、フィードバックがあることが授業改善の鍵である。具体的には、外国語教育については学生と教員との間の認識のズレはないかの再検討、スポーツ・健康教育については、何らかの形でスポーツ・健康施設の確保、資格取得・就職・進学支援体制についてはキャリアアップにつながる資格取得・学習支援体制の整備、図書館・情報環境については資料の加工・発信支援体制の改善が大学満足感につながると考えられる。

3 - 2 サークル活動・友人関係領域のQoSL

サークル活動に対する学生の意見は肯定と否定に分かれていることを前提に、サークル支援に当っては学習とサークル活動の両立を念頭に置いた支援策の具体化が課題である。他方、友人関係については、「多様な価値観」「異なったものの見方や考え方」「信頼と協力の大切さ」等さまざまな影響力の源泉であり、学習面におよぼす影響力も大きいことから、大学生活に不可欠な要素であり、大学は間接的な立場ながら、確実な条件整備が求められていると考えられる。

3 - 3 大学コミュニティ・施設立地領域のQoSL

大学祭などのイベントは学生の自律的主体的取り組みが前提であり、大学の役割は間接的な条件整備であろう。しかし、健康管理や窓口相談に加えて、「学生相談」「案内の分かり易さ」「アルバイトや下宿の斡旋数の豊富さ」などの具体的内容の改善は学生の満足度を高め、更に、卒業後への人的ネットワークにつなげていく方向性が示された。特に、今後大学に求められる、教育環境の質を考えると、学生が自由に話し合える室内空間を始めとして、キャンパスのアメニティがますます求められるのは確かであろう。

3 - 4 QoSLと学生生活の満足感・達成感・友人受容感

以上をまとめると、学生生活の質の内、「サークル活動」「施設・立地」「学習全般」「図書館・情報環境」「友人関係」「演習(ゼミ)」が大学満足感と関係し、学生生活の満足感は「サークル活動・友人関係領域」「大学コミュニティ・立地領域」「学習(学問・知的探求)領域」の全ての領域が総合して関わっていることが明かとなった。また、学習達成感は「講義科目」と「友人関係」が、友人受容感は、「サークル活動」「友人関係」「図書館・情報環境」が関係し、学習動機と対人社会性動機は密接に関係していた。

4. 各質問項目の集計結果と考察

4-1 大学生生活全般にわたる生活の質に対する意識

4-1-1 . 学習（学問・知的探究）について

1) 学習全般について

表1 1. 学習全般について（係数 = .54）	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 履修要覧や講義要項は分かりやすく役に立っている	36.1	30.2	33.7
2) 科目選択の自由があり、自主的な学習計画が立てられる	35.9	24.9	39.3
3) 資格取得に無理がないよう時間割が工夫されている	8.7	34.4	56.9
4) レポートが返却されるなど、提出物のフィードバックがある	12.5	24.3	63.2
5) 大学教育を受ける上で必要な基礎学力を補う支援体制がある	10.6	32.8	56.5
6) インターネットで休講掲示が見られ、レポート提出をしたい	54.9	29.6	15.5
7) 他大学との単位互換制度が充実している	3.0	32.3	64.7

学習全般についての調査結果を表1に示す。表1から、学習全般に対する学生の意見は、肯定的回答の比率が非常に少ない。特に、7) 他大学との単位互換制度、3) 資格取得に対する時間割の工夫（但し、ここで学生が取得したいと望んでいる資格は、SQから、語学関連、情報関連、教職関連、公務員関連に加えて、各専攻に関わる社会福祉士、認定心理士など非常に多様であり、中には、宅建、旅行業務取扱主任、自動2輪等も含まれている）5) 基礎学力を補う支援体制、4) 提出物のフィードバック、については6割の学生が現状に対して否定的回答をし、肯定的回答は1割に満たない項目が2つある。また、6) インターネットで休講掲示やレポート提出などの情報化推進への要望は5割を超えている。これに対して、1) 履修要覧や講義要項の使い易さ、2) 科目選択の自由度・自主的な学習計画の立て易さについては、肯定的回答と否定的回答は、ほぼ3割台で、肯定否定が相半ばしている。

以上から、分かり易い講義要項や科目選択の自由度に加えて、学生は「他大学との交流」「レポート返却」「資格取得へのカリキュラム上の配慮」「基礎学力の補習」などの学習支援を求めており、これらの対策を行うことが学習全般に対する評価を高めると考えられる。

2) 講義科目について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 知的興奮を感じる刺激的な講義科目がある	32.5	23.3	44.2
2) 一方的な講義だけでなく、学生が参加しやすい講義科目がある	20.0	36.9	43.1
3) 学習目標が明確で役に立つ講義科目が多い	11.9	35.9	52.1
4) 図示や資料を配付するなど、理解をうながす工夫がある	35.2	38.0	26.7
5) 私語を注意するなど、積極的な学習環境作りをしている	25.0	36.9	38.1
6) 授業を通じて教員との個人的接触がある	14.5	22.0	63.5
7) 授業時間以外にもE-mail等を使って双方向のコミュニケーションがとれる	13.4	23.6	63.0

講義科目についての調査結果を表2に示す。表2から、学生は、1) 知的興奮を感じる刺激的な授業、4) 図示や資料配付するなどの工夫、5) 私語を注意するなどの積極的な学習環境作りは2、3割の学生が肯定的に受け止めている。否定的な学生も存在するが、学生から一定の評価を受けているといえよう。他方、6) 授業を通じての教員との個人的接触、7) 授業時間以外のE-mail等による双方向コミュニケーションは、現状に対して非常に否定的である。7) - S Qから、学生は「ゼミ内共通掲示板」「授業用のHP」「授業後もしくはE-mailでの質問」などを求めているようだ。3) 学習目標が明確で役に立つ講義科目が少ないと5割の学生が現状を否定的に捉えている。

以上から、特に、大人数講義科目をいかに魅力的にするかは、双方向性、参加型講義、フィードバックを取り入れることに、講義改善の鍵があるといえる。

3) 演習(ゼミ)について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) ゼミでは学生が相互に学びあう協同学習の雰囲気がある	30.9	35.4	33.7
2) ゼミ学習には積極的に自ら参加している	35.2	34.6	30.1
3) 卒論やゼミ論の指導教員との関係は充実している	20.8	43.3	36.0
4) コンパ・合宿等、授業時間以外でも教員は学生と気軽に接してくれる	23.1	35.7	41.2
5) 助手やTAなど、ゼミを支援する人的体制が整っている	6.7	38.4	54.9
6) ゼミ発表や卒論のための資料作成の場や機器が整っている	23.5	41.2	35.3
7) ゼミの人数が多いために、討論を十分に行えないと感じるときが多い(逆転項目)	19.8	42.8	37.4

演習（ゼミ）についての調査結果を表3に示す。表3から、学生は、1）学生相互による協同学習、2）ゼミへの積極的参加、については、3割の学生が肯定的意見であり、ここにゼミの進むべき方向が示されている。続いて、6）ゼミ・卒論の資料作成の場や機器の充実、7）ゼミの人数が多く十分に討論が行えない（逆転項目）は、学部間や担当教員による格差がありそうだが、肯定2割、否定3割強で否定的意見の方が強い。6）-SQから、利用している場所の中心は図書館であり、図書館にレポートを書くためのパソコンの設置などの機器の充実が求められている。また、7）-SQの討論の阻害要因として、「学生側の非積極性」「私語」「発表がおもしろくない」などの学生の側のやる気の無さをあげる学生が多かった。5）助手やTA等の人的支援体制、4）授業以外での教員との気軽な接触、3）卒論やゼミ論の指導教員との充実した関係、に対しては否定的意見が非常に多い。

以上から、演習を活性化する要因は大きく3つあり、1つは、演習に対する「学生の積極性と自発性」、2つは、「教員のゼミに対する姿勢・態度」、3つは、「助手制度や大学院との連携などの基本的な教学体制の整備」が考えられる。これらの3要因をいかに相乗的に機能させるかが課題であろう。

4）外国語教育について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 履修外国語の授業人数が多すぎる（逆転項目）	24.0	25.1	50.8
2) カリキュラムは外国語能力検定試験などを視野に入れて作られている	3.9	22.4	73.7
3) 図書館の外国語教材は充実している	9.0	51.1	39.8
4) 外国語教育センターのような学生の自主的学習の支援施設がほしい	47.8	36.0	16.2
5) 外国語のスキルアップに役立つ授業がある	19.1	34.3	46.6
6) 視野を広げ、異なる見方に目覚めるような外国語の授業がある	21.3	29.9	48.8
7) 留学生、社会人など特別なニーズをもつ学生への学習支援体制がある	10.6	48.7	40.7

外国語教育についての調査結果を表4に示す。表4から、学生は外国語教育については、批判的意見が目立つ。特に、2）外国語能力検定試験を視野に入れたカリキュラム、3）図書館の外国語教材、7）留学生・社会人などの特別なニーズをもつ学生への対応は否定的意見が4割～7割を占める。3）-SQから、欲しい教材として、「BBC、CNNの映像」「英字新聞」「TOEIC、TOEFL、英検、通訳の資料」「日本語字幕と英語字幕の両方出るビデオ」「ドイツ語の雑誌」など多様な教材が求められている。また、授業内容については、5）外国語のスキルアップに役立つ、6）視野を広げ、異なる見方に目覚めるような授業が求められ、そのような授業環

境を可能にするために、4) 外国語教育センターのような自主的学習の支援施設を求める意見が何れも5割を占めている。

以上から考えると、授業目標、授業内容、外国語教育の学習支援体制などの全般にわたって、学生と教員の間認識のズレがないかなどの再検討が求められているといえよう。

5) スポーツ・健康教育について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 取りたい実技種目・講義科目がある	49.6	24.5	25.8
2) 肥満や痩せなど健康管理についての授業は役立っている	20.4	47.5	32.1
3) スポーツ健康センターのような学生向け自主的学習支援施設が欲しい	57.7	28.7	13.6
4) 健康やスポーツの生涯設計・自己管理を指導する体制が整っている	8.7	51.5	39.7
5) 生涯学習という観点からカリキュラムや授業内容が考えられている	7.8	49.1	43.1
6) 障害者、社会人など特別なニーズをもつ学生向けの教育支援体制がある	5.7	46.2	48.1
7) 4年間に渡って使えるスポーツクラブのようなスポーツ健康施設が欲しい	74.0	16.6	9.4

スポーツ・健康教育についての調査結果を表5に示す。表5から、学生は、7) 4年間に渡って使えるスポーツ健康施設、3) スポーツの自主的学習支援施設の充実を望んでいる学生が6、7割と多数を占める。授業内容については、1) 取りたい実技科目・講義科目があると、5割の学生から肯定的に受け止められている。その上で、6) 障害者・社会人などの特別なニーズをもつ学生、5) 生涯学習視点に立ったカリキュラム・授業内容の充実、4) 健康・スポーツの生涯設計・自己管理指導体制、2) 肥満や痩せなどの健康管理、に関わる授業内容の充実が、更に、求められているといえよう。具体的には、6) - S Qから、バリアフリー、点字、エレベーター、手すりなどの設備の充実、4) - S Qから「学生が自由に使えるスポーツジム」「体力トレーニングの方法を掲示板などにのせてほしい」「体力測定(有料でも可)を希望者だけでもいつでもできるように」「性に関する相談が気軽にできるところがあるといいと思う。産婦人科に行くのは勇気がいるから」等の意見があった。

以上を考えると、白山における4年間一貫教育体制が発足すれば、狭隘な白山校地だけに、白山校地ないし、その近辺に、何らかの形のスポーツ・健康施設の確保を学生から強く求められる事態になるであろう。

6) 資格取得・就職・進学支援体制について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 就職部の窓口は情報が豊富で利用しやすい	11.0	58.8	30.2
2) インターネットによる求人情報など必要なシステムが大学で利用できる	23.6	53.4	23.0
3) 本学で取得可能な資格についての情報は十分与えられている	10.9	33.1	56.0
4) 司法試験・教員免許などの受験指導の支援体制は充実している	10.4	50.3	39.3
5) 公務員試験のための支援体制が充実している	8.7	54.3	37.0
6) 海外の提携校への留学制度があり留学情報や支援体制は充実している	17.0	52.4	30.6
7) 他大学の大学院を含めた進学のための情報は豊富である	2.5	53.7	43.8

資格取得・就職・進学支援体制についての調査結果を表6に示す。表6から、学生は、2) インターネットによる求人システムの大学での利用には、肯定否定の意見が2割強で相半ばしているが、1) 就職部窓口の情報量や利用し易さ、3) 取得可能な資格についての情報(逆転項目)については、否定的回答が3割~6割を占める。具体的内容として、就職に関わる、4) 司法試験・教員免許などの受験支援体制、5) 公務員試験の受験指導体制、の充実を、留学や大学院進学に関わる、6) 海外の提携校や留学情報などの支援体制、7) 他大学を含めた大学院進学のための情報、等の豊富な情報提供が求められている。

以上から、大学は卒業証書だけでなく、就職や進学に際してキャリアアップにつながる資格取得や学習支援体制の整備が強く求められているといえよう。

7) 図書館・情報環境について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 視聴覚室には語学教材やビデオ教材など、自主的学習のための支援体制が整っている	36.3	39.2	24.5
2) 図書館には利用したい本や雑誌がほぼそろっている	32.5	22.5	45.0
3) 図書館では書誌情報検索・外部データベースの利用が容易である	45.2	31.1	23.6
4) 長期休暇中も図書館の開館日が十分にある	27.4	42.7	29.9
5) 図書館で調べた資料を電子的に加工・表現するための支援体制がある	8.5	50.7	40.8
6) 学生からの図書購入要求が可能で、迅速なフィードバックがある	12.9	61.1	28.0
7) コンピュータが苦手な学生のための支援体制が整っている	13.3	33.6	53.1

図書館・情報環境についての調査結果を表7に示す。表7から、学生は、3) 書誌情報検索・

外部データベースの利用の容易さ、1) 語学教材・自主的学習のための支援体制、については、肯定的回答の比率は4割前後と高く、また、2) 利用したい本や雑誌の充実度、4) 長期休暇中などの図書館開館日の確保、などは肯定的回答が3割前後あり、学生から一定の評価を受けているといえよう。他方、否定的ないし改革が求められている具体的内容には、7) コンピュータが苦手な学生のための支援体制、5) 図書館等で得た資料の電子的加工・表現のための支援体制、6) 図書購入要求に対する迅速な対応とフィードバックが求められている。

以上から、図書館や情報センターは比較的肯定的に受け止められているが、「パソコンの利用支援」「資料の電子的加工・表現」「迅速な対応・フィードバック」に改善の方向性が示されているようだ。

4 - 1 - 2 . サークル活動・友人関係について

8) サークル活動について

表8 8 . サークル活動について (係数 = .64)	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) サークル活動に、勉強以上に時間を割いている	22.5	21.5	55.9
2) サークル活動と学習を両立している	29.1	33.7	37.2
3) サークルにはあまり関心がない(逆転項目)	29.0	21.1	49.9
4) サークル活動に参加してはじめて得られるものがある	54.3	30.1	15.6
5) サークル活動での集団体験は、就職など将来に役立つと思う	53.1	27.8	19.1
6) 大学からのサークル活動に対する支援は十分なされている	11.2	48.5	40.3
7) 現在存在しない、新しいサークル活動を始めたい	18.5	28.5	53.0

サークル活動についての調査結果を表8に示す。表8から、学生は、先ず、実態として、1) サークル活動に勉強以上に時間を割いている、2) サークル活動と学習を両立させている、に肯定的に答える学生は2割～3割で、否定的回答は4割ある。次に、このようなサークル活動の意義ないし位置づけについては、4) サークル活動に参加してはじめて得られるものがある、5) 集団体験は就職などの将来に役立つ、と考える肯定的回答が5割強ある反面、そう思わないと否定的に回答する学生も2割弱いる。また、6) 大学からのサークル活動に対する支援は十分ではないとする意見は4割を占める。7) 新しいサークル活動を始めたいの具体的内容は、7) - SQから、「模擬国連活動」「ハリポタ研究会」「イベント系サークル」「サーフライフセービング」「資格支援サークル」などがあげられている。

以上は、サークル活動に対する学生の意見は肯定と否定に分かれていると推測されるが、サー

クルに対する支援と、学習とサークルの両立を念頭に置いた支援策の具体化が課題であろう。

9) 友人関係について

表9 9. 友人関係について (係数 = .48)	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 友人との関係から得るものは大きい	84.5	10.4	5.0
2) サークルに所属していなくても友人同士で集まれる場所がほしい	70.2	21.2	8.6
3) 学科の中で仲間と知り合えるような機会が多い	30.1	30.9	39.0
4) 学科をクラス担任制のような少人数のグループ分けをしてほしい	47.1	30.7	22.2
5) 他大学との討論会など、交流のための企画がほしい	37.3	37.1	25.6
6) スポーツやサークル活動を通じて他大学との交流の機会が多い	15.0	27.0	58.0
7) 他大学の学生との仲間づきあいがあり、頻繁に交流している	16.3	21.8	61.9

友人関係についての調査結果を表9に示す。表9から、学生は、1) 友人との関係から得るものは大きいと、肯定的回答が8割を超えている。1) - SQから、友人関係から得たものとして、「さまざまな価値観や情報」「異なった見方や考え方」「信頼」「人と協力することの大切さ」「人づきあいのしかた、人脈」など様々にある。しかし、現状認識については、3) 学科の仲間と知り合える機会が多い、6) スポーツやサークル活動を通じての他大学との交流の機会が多い、7) 他大学の学生との仲間づきあいがあり、頻繁に交流しているに対する否定的回答が4割～6割ある。さらに、2) サークルに所属していなくても友人同士集まれる場所が欲しい、4) 学科をクラス担任制のような小グループに分けて欲しい、5) 他大学との討論会などのような交流企画を望む意見は、4割～7割ある。

以上は、サークル活動とは異なり、友人関係は大学生活に不可欠な領域であり、大学には間接的な条件整備が求められているといえよう。

4 - 1 - 3 . 大学コミュニティ・施設立地について

10) 大学コミュニティ及び教員との関係について

表10 10. 大学コミュニティおよび教員との関係について (係数 = .72)	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 学生が大学に対して意見を言える場がある	5.1	27.5	67.4
2) 大学にはコンテストや弁論大会など自己表現できる場がある	8.3	41.3	50.5
3) 大学祭は同じ大学に学ぶ者としての一体感が感じられる	17.7	32.8	49.4

4) 教員とは学問のみならず、良き相談相手としての関係を築きたい	57.3	27.6	15.0
5) 教員とはゼミやコンパなどを通じて人間同士の付き合いがしたい	51.7	31.3	17.0
6) 教員には人生の指導者として常にリーダーシップを期待している	38.9	35.8	25.3
7) 学生が研究室を訪ねるためのオフィスアワーは教員との交流に役立っている	15.1	45.9	39.0

大学コミュニティ及び教員との関係についての調査結果を表10に示す。表10から、学生は学生と教員の関係について、4) よき相談相手としての関係、5) 人間同士の付き合い、6) 人生の指導者としてのリーダーシップを期待している、とする意見は4割～6割あった。また、教員との交流の場については、7) オフィスアワーは教員との交流に役立っているとの質問には、否定的意見が4割で、次いで、大学祭などのイベントについては、3) 大学祭は同じ大学に学ぶ者としての一体感が感じられる、2) コンテストや弁論大会などの自己表現できる場については、否定的意見が5割と多かった。

以上は、教員との関係は「よき相談相手」「人間同士の付き合い」「リーダーシップ」などを求めており、また、大学祭などのイベントについては、学生の自律的主体的取り組みが前提であり、これらの意見は大学に向けられているというよりも、学生同士で対策をこうじるべき点多いであろう。むしろ、1) 学生が大学に対して意見を言える発言の場、ないし位置でけが大学の課題であろう。

11) 職員やOB・OGとの関係について

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 学生窓口は、説明がわかりやすくいていねいである	27.4	36.7	35.9
2) 学生相談(カウンセリング)室は入りやすく頼りになりそうだ	11.2	47.4	41.4
3) 年1回の健康診断は健康管理の頼りになる	50.8	28.3	20.8
4) 医務室は利用しやすく医薬品も調べていて頼りになる	34.9	25.3	17.5
5) 奨学金制度やその案内はわかりやすい	15.6	45.7	38.7
6) アルバイトや下宿の斡旋は数が豊富で充実している	8.5	47.7	43.8
7) 卒業後も活用できそうな卒業生の人的ネットワークがある	5.9	39.8	54.3

職員やOB・OGとの関係についての調査結果を表11に示す。表11から、学生は、主に学生部に関わる事柄のうち、3) 年1回の健康診断は健康管理の頼りになる、4) 医務室は利用しやすく医薬品も調べていて頼りになる、1) 学生窓口は、説明が分かり易くていねいに対して、3割～5割の学生が肯定的に受け止めている。他方、6) アルバイトや下宿の斡旋数の豊富さ、

2) 学生相談（カウンセリング）室の入り易さや信頼性、5) 奨学金制度や案内の分かり易さ、に対する肯定的回答は、各々1割程度と低く、否定的回答は4割と多い。

以上から、健康管理や窓口相談に加えて、「学生相談」「案内の分かり易さ」「アルバイトや下宿の斡旋数の豊富さ」などの具体的内容を改善することにより、学生の満足度を高め、更に、卒業後への人的ネットワークにつなげていく方向性が示されているようだ。

12) 施設・立地について

表12 12. 施設・立地について（係数 = .71）	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 校舎への交通の便はよい	14.2	16.3	69.5
2) 大学キャンパスの周辺環境は整備されている	11.9	21.9	66.2
3) 食堂や教室などの大学生活の施設は充実している	21.8	26.7	51.5
4) 学生食堂は混雑して利用できないことが多い（逆転項目）	65.2	16.4	18.5
5) 学食のメニューは、健康に配慮したメニューになっている	15.7	43.6	40.7
6) 生協は品揃えが豊富で欲しいものはだいたい揃っている	34.7	30.6	34.7
7) 思索を巡らし、自由に話し合える室内空間がある	12.4	32.0	55.6

施設・立地についての調査結果を表12に示す。表12から、学生は、キャンパスの立地については、1) 校舎への交通の便はよい、2) 大学キャンパスの周辺環境は整備されているに対しては7割の学生が否定的である。但し、キャンパス別の分析が必要であろう。大学の施設については、3) 食堂や教室などの大学生活施設は充実しているに対して、否定的意見が5割を占める。4) 学生食堂は混雑して利用できないことが多い（逆転項目）、5) 学食のメニューは健康に配慮しているは、いずれも否定的意見は4割～6割ある。6) 生協は品揃えが豊富で欲しいものはだいたい揃っているは、肯定・否定が共に35%で、相半ばしている。

以上から、大学に求められる教育環境の質を考えると、7) 思索を巡らし、自由に話し合える室内空間を始め、キャンパスのアメニティがますます求められるのは確かであろう。

4 - 1 - 4 . 総合的評価について

13) 総合的評価について

総合的評価についての調査結果を表13に示す。表13から、学生は大学生活における満足度は、満足感があるが3割である。次に、2) 学習達成感は2割、3) 友人受容感は2割強の学生が肯

定的に答えている。逆に、学習達成感があるとは思わない学生は5割、友人受容感があるとは思わない学生が1割弱いる。この要因と考察については次節で分析する。

	そう思う %	どちらでもない %	そう思わない %
1) 大学における学生生活に満足感がある	31.1	31.5	37.5
2) 大学における自分自身の学習目的に達成感がある	18.9	31.3	49.7
3) 大学生活で自分は友人から受け入れられているという受容感がある	45.2	38.8	15.9

4 - 2 学生生活の質に対する重回帰分析

1) 大学生活に対する満足感、2) 学習活動に対する達成感、3) 友人からの受容感と学生生活の質との関係について、前者を従属変数、後者を独立変数とするモデルに従って分析した結果を次に示す。

表14 学生生活の満足感の重回帰分析の結果

		有意確率	相関係数
学習全般	0.134	0.007	0.110
講義科目	0.088	0.072	0.074
演習(ゼミ)	0.094	0.043	0.083
外国語教育	-0.092	0.058	-0.077
スポーツ・健康教育	-0.008	0.858	-0.007
資格取得・就職・進学支援体制	-0.078	0.123	-0.063
図書館・情報環境	0.123	0.020	0.095
サークル活動	0.225	0.000	0.209
友人関係	0.112	0.017	0.098
大学コミュニティおよび教員との関係	0.043	0.386	0.035
職員やOB・OGとの関係	0.005	0.922	0.004
施設・立地	0.189	0.000	0.159
重相関係数(R)	0.505	0.000	

先ず、学生生活の満足感の重回帰分析結果を表14に示す。表14から、学生生活の満足感と有意に関係する学生生活の内容は、[サークル活動]「施設・立地」「学習全般」「図書館・情報環境」「友人関係」「演習(ゼミ)」であり、学生生活の満足感には「サークル活動・友人関係領域」

「大学コミュニティ・立地領域」、「学習（学問・知的探求）領域」の全ての領域が関わっている。

これを更に、達成感と友人受容感に分けた結果が表15、16に示されている。表15から、学習達成感に関わる要因は「講義科目」と「友人関係」である。

表15 学習達成感の重回帰分析の結果

		有意確率	相関係数
学習全般	0.059	0.248	0.048
講義科目	0.224	0.000	0.188
演習（ゼミ）	0.079	0.097	0.070
外国語教育	0.080	0.107	0.068
スポーツ・健康教育	-0.007	0.884	-0.006
資格取得・就職・進学支援体制	-0.071	0.175	-0.057
図書館・情報環境	0.089	0.102	0.069
サークル活動	0.076	0.094	0.070
友人関係	0.114	0.018	0.100
大学コミュニティおよび教員との関係	0.048	0.344	0.040
職員やOB・OGとの関係	-0.019	0.709	-0.016
施設・立地	0.086	0.084	0.073
重相関係数（R）	0.458	0.000	

以上の結果は、基礎的知識・理解は講義科目から得られ、そのような学習は、「友人関係」の中で相互に影響しあいながら学習されることが反映していると解釈した。また、友人受容感については、表16に示されている。表16から、友人受容感に関わる要因としては、「サークル活動」、「友人関係」と「図書館・情報環境」が有意に関係していた。

表16 友人から受け入れられているという受容感の重回帰分析の結果

		有意確率	相関係数
学習全般	-0.017	0.750	-0.014
講義科目	-0.015	0.778	-0.012
演習（ゼミ）	0.026	0.599	0.023
外国語教育	-0.090	0.085	-0.076
スポーツ・健康教育	0.064	0.208	0.055
資格取得・就職・進学支援体制	0.004	0.944	0.003
図書館・情報環境	0.146	0.011	0.112

サークル活動	0.163	0.001	0.151
友人関係	0.149	0.003	0.130
大学コミュニティおよび教員との関係	0.080	0.134	0.066
職員やO B ・ O G との関係	-0.005	0.927	-0.004
施設・立地	0.050	0.341	0.042
重相関係数 (R)	0.371	0.000	

以上の結果は、「サークル活動」「友人関係」は友人関係そのものであるが、「図書館・情報環境」が有意に関係したことについては、図書館は知識のセンターであり、協同利用施設として学生が相互に影響しあう場であり、また、PC室などの情報環境も相互に教え合う場であることを反映していると解釈した。

5 今後の課題

学生生活の質という概念は、大学満足感や学習達成感との関係で、今後重要さを増すであろうし、概念的にはなく、資料に基づいた議論の積み重ねと、大学改革に結びついた行動化がますます重要になるであろう。そこで、今後の課題としては、第1に、学生による大学生活の質尺度をより確かな尺度にするために、他大学に広げて一般化し、信頼性、妥当性などについて検討する必要がある。第2に、一般化の過程で、東洋大学の特殊性なり、独自性なりを明らかにして、東洋大学の個性ないし独自性を高める方向での検討も必要である。第3に、今回の概念的枠組みは一応の係数の高さを示しているが、更に、大学生活の質尺度の内的構造を探索的因子分析、ないし、確証的因子分析などの多次元解析法を用いて検討すること、少なくとも以上の課題が残されている。

・研究2 (大学教育改革に対する教員の意識と行動 - 東洋大学における教員の意識調査の結果から -)

1 . 調査の目的

本研究グループでは、次の3つを目的として「教員の大学改革・教育改革に対する意識調査」を企画し、実施した。

第1は、教員自身の大学教育観、学生観、授業観および授業改善にかかわる意識と行動を明らかにすることである。とくに、同時期に行った学生対象の意識調査と比較することによって、両者の認識のずれを明確にし、大学の教育改革において優先的に解決すべき課題は何かを明らかにする。

第2は、大学教員が主体的に取り組む教育改革とりわけ授業改革において、改革の障害になっている要因は何かを明らかにすることである。改革に前向きで、実際に授業改革に取り組む教員は少なくないが、そうした教員が日常的に困難を感じている点とそれが生み出される背景を明らかにすることで、今後の教育改革のために必要な条件整備とは何かを明確にする。

第3は、教員の力量形成や力量発揮に、自律的教育組織としての教員集団がかかわる可能性を展望することである。大学というコミュニティへの信頼や教員間の合意形成など、教員集団に協同的關係がなければ、教員同士が力量形成を促しあうことを期待することは難しい。

本研究で、このような三つの目的を設定した背景には、大学教育改革を教員の努力だけに求めることには限界があるのではないかという仮説がある。教育目標や教育方法の妥当性は、学習者である学生自身の成長・発達の如何によって評価されなければならないが、一方で教育目標や教育方法の妥当性を評価するためには、目標や方法にふさわしい教育条件の整備が法人によってなされなければならない。また、教員自身の力量形成を単に教員個人の努力の結果とみなすのではなく、集団的力量形成の機会を保障するような組織であることが、教育組織としての大学には求められている。

その意味でこの調査は、教員自身が学生や法人、あるいは教員集団をどのように評価し、どのような方向への改善を求めているかを明らかにするものともいえる。

2. 調査の方法

2 - 1 調査対象および実施時期

この「教員の大学改革・教育改革に対する意識調査」は、東洋大学の全教員を対象として質問票を配布し、2002年12月3日から2003年1月3日の期間に、合計127名から回答を得たものである。回答者は、白山、朝霞、川越、板倉の各キャンパスに分布しているが、その区別は行っていない。また、年齢、性別など個人の特定につながりやすい調査項目は、今回質問していないため、不明である。

2 - 2 質問紙および質問項目の枠組み

質問票および質問項目は、後掲資料のとおりである。なお、質問項目の枠組みは、大きくわけて次の5つに分類することができる。各質問項目については、回答結果の分析・考察の中に掲げることとした。

1. 教員の現状認識と期待する大学教育改革の方向性
2. 教員の学生観、教員観、大学教育観
3. 教員の大学授業に対する意識と授業改善の工夫
4. 教員の大学コミュニティ（組織・施設）観
5. 教員の力量形成の実態と期待する条件整備

したがって、後述の分析は、上記5つの枠組みに沿っている。

2 - 3 回収方法および母集団の性格

この調査は、東洋大学各学部教授会を通して配布を依頼し、回答は講師控室に回収箱を置き、回答者が自由に投入するという方法で実施した。そのため、当然のことながら大学改革に関心の低い層からの回答は少なく、大学改革に関心の高い層が回答を寄せたと推定される。このことは、自由記述回答からも推測され、そのことによる回答の偏りは否定できない。しかし同時に、大学改革や教育改革に関心を寄せる教員層が、どのような大学教育観、学生観、教員観をもって日常の改革に取り組み、今後の大学改革を担っていこうとしているかを探ることができるという利点もある。

また、これらの教員こそが今後の大学改革を支える層であることを考えるとき、こうした教員層の先進的取り組みや問題意識を探ることは、今後の大学改革への手がかりを得る上で大変重要なことではないかと思われる。

3 . 調査結果の概要と結論

3 - 1 教員の現状認識と期待する大学教育改革の方向性

大学の教育改革をできるだけ早く進めるべきとの意見が多数を占める一方で、拙速を恐れる慎重さを求める声も多く、教育改革の方向がみえない中での悩ましい気持ちも数字によく表れている。教育改革で優先すべき事項として、授業改革をあげる教員が最も多いことも特徴的である。

3 - 2 教員の学生観、教員観、大学教育観

教員の多くは、学生のみじめさ、誠実さを評価しているものの、積極性についてはあまり評価していない。しかし、学生との接触機会が少ないために、こうしたイメージが作られる可能性もあり、今後受講生数との関連を調査する必要がある。

教員自らがめざす教員像については「幅広い知識と学び方の伝達者」でありたいと望む教員が大多数であり、「人生のよき相談者」でありたいと望んでいる教員も多い。多くの学生も同様の期待をしていることから、期待される教員像について学生との間の意識のずれはないといえる。しかし、学生意識調査から、教員へのこうした期待が実現されていないことが明らかになっており、今後実現を妨げているものが何かを明らかにする必要がある。

大学教育観についても、学生の主体性を重視する意味で、課外活動への大学のかかわりは条件整備中心であることを教員は望んでいることがわかった。

3 - 3 教員の大学授業に対する意識と授業改善の工夫

7割以上の教員が授業評価による授業改革に前向きであり、同時に授業改善の工夫にも熱心である。8割の教員がなんらかの補助資料を配布し、学生の発言の機会をできるだけつくるようにしていると答えている。ただし、こうした授業改革を進める上での障害として大多数の教員があげたのが「学

生の人数」と「多忙」である。個人的に努力をしてきた教員ほど、条件整備の貧しさに強く不満を持つのであろう。

また、ゼミナール運営上の問題点に関しても、就職活動の早期化、長期化によって、大学後期の教育が瓦解しつつあることを指摘する意見があり、これへの対策の必要性も判明した。

3 - 4 教員の大学コミュニティ（組織・施設）観

回答者のうち、クラス・担任制度の導入に肯定的な教員は半数に満たない。このことは前述の大学教育観ともかかわっている。

また、大学の意思決定への改善要求は高く、とりわけ法人改革を望む声が多い。「教員がもっと積極的に意見をいうべき」との意見も多数あるが、法人に期待する意見のほうが多いということは、ある種の無力感の表れにも見える。一方で、学生にもっと発言の機会を与えるべきとの意見も7割弱あり、こうした改革については肯定的である。

3 - 5 教員の力量形成の実態と期待される条件整備

力量形成のための十分な時間が確保されていないと感じている教員は8割以上であった。また、多忙ゆえに教員同士の交流や人間関係づくりが妨げられていると感じている教員も6割以上いる。しかし一方で、教員集団に協同的關係を認めている教員も半数を超えており、今後の集団的力量形成を展望するだけの基盤は成立している。今後は、組織として教員の力量形成を保障する機会を設け、さまざまな条件を整備することが求められている。

4 . 各質問項目の集計結果と考察

では、回答の集計結果を、質問ごとに見てみよう。なお、単純集計結果は調査報告書『学生生活の質と大学満足度の研究』（東洋大学現代社会総合研究所、2004年）に掲載予定のため、以下では、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を選択した回答者の割合（%）を合計し、これを「肯定的」回答に分類し、分析することにした。なお、「どちらでもない」は各質問に対する判断保留の表明と見て、分析を行うこととした。

4 - 1 教員の現状認識と期待する大学教育改革の方向性

(1) 質問1「現在の大学は、18歳人口の減少、学生の学力低下、大学のユニバーサル化（大学進学率が50%に近づくことをこう呼ぶ）など、様々な課題を抱えています。こうした中で、今後東洋大学は、積極的に教育改革を進めるべきだと思いますか。」への回答

質問1の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1. 改革の方向を議論し、できるだけ早く進めるべきだと思う | 79.0% |
| 2. 教育改革はあせらず慎重に行うべきだ | 56.9% |
| 3. 教育改革にはあまり関心がない | 6.6% |

上記の結果から「改革の方向を議論し、できるだけ早く進めるべき」に肯定的な教員が8割を占める一方で、「慎重に行うべき」に肯定的な教員も6割弱と多いことがわかる。これは、現在の改革の重要性を認識する一方で、その方向に対しては、疑問や不安をめぐえず、拙速を恐れる教員が少なくないことを示している。実際、上記1と2の項目に対して「どちらでもない」と回答した教員の割合がいずれの場合も約1割を占めていることを考えると、改革への態度を明確にできないなんらかの理由が背景にあることが推測される。

大学の教育改革の方向が、当事者である教員自身によく見えないという状況が続けば、今後教員の当事者意識の低下を招く危険性も懸念される。

- (2) 質問2「もしも今後東洋大学が教育改革を推進していくとしたら、あなたはどのような改革を優先していくべきだと思いますか。次の中から優先すべきだと思うものを三つ選んでください。」への回答

質問2の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|--------------|-------|
| 1. カリキュラム改革 | 63.5% |
| 2. 入試改革 | 41.6% |
| 3. 授業改革 | 85.2% |
| 4. 進路支援体制の改革 | 47.1% |
| 5. 学生支援体制の改革 | 58.4% |
| 6. 大学の個性化 | 65.6% |

肯定的な回答が多かったのは、「授業改革」「大学の個性化」「カリキュラム改革」の順である。これを見る限りでは、大学の教育改革における授業改革やカリキュラム改革の重要性は共通に認識されていると見ることができる。しかしSQの自由記述回答にみる「大学の個性化」についてのイメージは多種多様で、共通理解が成立しているとは言い難い。

4 - 2 教員の学生観、教員観、大学教育観

- (1) 質問3「東洋大学の学生について日常感じていることをお答えください」への回答

質問3の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|------------------------------|-------|
| 1. 積極的に質問・発言するなど学ぶ意欲の高い学生がいる | 13.6% |
| 2. 私語や携帯電話など学生の受講マナーはよい | 42.4% |
| 3. ゼミや講義で、学生の問題意識の高さを感じる | 20.8% |
| 4. 積極的に研究室を訪ねてくる学生が多い | 20.0% |
| 5. 学生は概してまじめで誠実である | 70.7% |
| 6. 出席は学生の権利であって義務ではないと思う | 40.5% |

教員の多くは、学生に対して、まじめで誠実であるとは見ているが、「積極的」「意欲的」「問題意識が高い」とは見えていない。しかし一方で、上記の項目はいずれも「どちらでもない」の回答が2割から3割を占め、判断保留を示す割合が他の質問に比べて高い。これは、学生との接触機会が少ないための判断保留か、学生に対して漠然とした理解（イメージ）にとどまっているかのどちらかではないかと思われる。

また、こうした学生観が形成される背景には、担当科目における受講生の数が多い、双方向の授業形態がとりにくい等の原因が隠れている可能性があり、今後教員と学生との相互理解を促進するための方策が練られる必要がある。

(2) 質問4「あなたは、学生にとってどのような存在でありたいと思いますか」への回答

質問4の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1. 専門的な知識や技術を身に付ける上でのよき指導者 | 88.8% |
| 2. 今後学びつづける上で必要な幅広い知識と学び方の伝達者 | 96.0% |
| 3. 学問のみならず、人生のよき相談者 | 63.2% |

教員の多くは、専門的か一般的かを問わず、知識と文化の伝達者・指導者でありたいと願っている。また、6割強の教員が、人生のよき相談者でありたいとも答えている。このことは、大学の教育改革にとって大きな財産である。

たとえば、同時期に行った学生対象の意識調査（「学生生活の質調査」）の質問10・4）の回答結果によれば、「教員とは学問のみならず、良き相談相手としての関係を築きたい」という項目に対して、肯定的回答が57.3%、否定的回答が15.0%となっており、学生の求める教員像と教員がめざしている教員像とのあいだに、大きな齟齬はない。

しかし、質問2・6）「授業を通じて教員との個人的接触がある」に対する学生の回答は、肯定的回答が14.5%、否定的回答が63.5%となっており、学生が求める「よき相談相手」との接触は、

期待しているほどには得られていない。

また、「一方的な講義だけでなく、学生が参加しやすい講義科目がある」についても、肯定的回答は20.0%で、否定的回答43.1%のわずか半分に過ぎない。さらに「授業時間以外にもE-mail等を使って双方向のコミュニケーションがとれる」も肯定的回答が13.4%、否定的回答が63.0%と、学生の評価はいずれも否定的であり、教員がめざす教員像が実現しているとはいえない実態が浮かんでくる。

教員と学生との間に、教員像をめぐる意識のずれはさほど見られないにもかかわらず、実現が妨げられているとしたら、その障害となっているものは何なのかを特定することが緊急の課題ではないか。

- (3) 質問5「大学は、学生の課外活動（サークル活動やボランティア、学園祭など）や友人関係に関してどのような支援を行うことが望ましいと思いますか。」への回答

質問5の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 1. 場所や機会の提供は行うが、学生の自主性に任せるべき | 85.3% |
| 2. 場所や機会の提供のみならず、組織化し、広報活動を行うべき | 23.3% |

学生の課外活動や友人関係に関しては、大学としては条件整備をすることが重要で、学生の自主性に任せるべきとの意見が多い。学生対象意識調査の結果からも、課外活動にかかわる条件整備が大学生の満足度の影響要因として大きな位置を占めることが明らかになっている。したがって、条件整備が中心であるとしても、教員の考える「大学教育」があくまで学生の自主性を前提として成立していることを学生にもっと強調する必要があるのではないか。それは、こうした大学像が学生に理解され自主性が発揮されることで、条件整備も進むからである。

4 - 3 教員の大学授業に対する意識と授業改善の工夫

- (1) 質問6「あなたは、学生による授業評価を実施することに対してどのように考えますか。ただし、ここで言う「授業評価」は、教員の人事考課などに利用されないことを前提とします。」への回答

質問6の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| 1. 学生による授業評価を全科目について実施する方向で努力すべきだ | 72.0% |
| 2. 学生による授業評価を行うか否かは、教員の自主的判断に任せるべきだ | 41.3% |
| 3. 学生による授業評価に大きな意義があるとは感じられない。 | 12.3% |

4. 授業評価は学生におもねることになり、かえって学ぶ謙虚さを損なう 16.4%

学生による授業評価に対しては、7割以上の教員が賛成している。しかし一方で、「自主的判断に任せるべき」という意見への肯定的意見も4割と根強い。ここには、一般論としての授業評価には積極的でも、実施に際してはアンケートの内容によって賛否を選択しうる余地を残しておきたいという意識が見える。

また、授業評価に否定的な意見の中には、次のような自由記述回答もある。

「人気投票にならないやり方をどう構築できるかが問題だ」(質問6 4-SQ)「学ぶことの謙虚さ、わからなかったことがわかる喜びは授業の過程で育てて来た/行くはずで、それが先達への敬意や後進への共感につながるものです。授業評価は、これらを根底として成り立つものと考えます。そうでない、消費者満足度アンケートに意義を感じません」(質問6 4-SQ)ここには、授業評価によって、大学の授業が学生の興味や関心、嗜好に迎合するものへと変質するのではないかと懸念が語られている。

教育評価はそもそも、教育目標の達成度との関係で語られるべきであるが、その目標設定の方法には、学生の実態（発達段階）から導き出そうとするアプローチと、個々の学問の要求水準から導き出そうとするアプローチとがある。授業評価に否定的な教員が後者のアプローチを採用して授業を構想した場合、学生の授業観とのギャップをどう埋めていくかが課題となる。今後、授業評価の結果を、教員と学生との間の授業観のギャップを埋めるために活用していくことで、授業評価に否定的な教員の懸念に答えることができるのではないだろうか。

(2) 質問7「多人数授業とそれを補う工夫について意見をお聞かせください。」への回答

質問7の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

1. 講義やゼミなどで、学生の人数が多すぎるために、授業の進行の障害になっていると感じることが多い	67.2%
2. 質問の時間などを設けて、学生の理解を補うようにしている	69.3%
3. 小グループに分けてディスカッションさせたり、発表させたりしている	50.4%
4. 学生に質問・感想用紙をくばって、自由に書かせるようにしている	44.3%
5. 質問のある学生には、個別に研究室に来よう指導している	58.6%
6. できるだけ補助資料を配布するようにしている	79.5%
7. OHPやビデオ教材などの視覚教材を利用し、理解を助けるようにしている	62.8%
8. ときどきレポートや課題を課し、理解度をチェックするようにしている	86.4%

7割近くの教員が、学生の人数の多さが授業進行の障害になっていると回答している。また一方でそれを克服するために、半数以上の教員がなんらかの工夫を試みている。このことは、回答者である教員が授業運営上の努力を行っていることの表れでもあるが、一方で、教員のこうした努

力は学生側にはあまり伝わっていないと思われる。

たとえば、学生対象意識調査「学生生活の質調査」質問2の回答結果によれば、「一方的な講義だけでなく、学生が参加しやすい講義科目がある」に対する学生の回答は、肯定的回答が20.0%、否定的回答が43.1%と、否定的回答が大幅に上回っている。また「学習目標が明確で役に立つ講義科目が多い」に対しても、肯定的回答11.9%、否定的回答52.1%と、学生の授業に対する評価は厳しい。ただし、「図示や資料を配付するなど、理解を促す工夫がある」については、肯定的回答が35.2%、否定的回答が26.7%と、若干肯定的回答が上回ってはいる。しかし、「できるだけ補助資料を配布するようにしている」と答えた教員が8割近くに上ることを考えると、教員の認識と学生の認識との間にずれがあることは、否めない。

むしろ前述のように、ここで分析対象としている教員は、あくまでこの調査に回答を寄せた教員であり、それはどちらかといえば、大学における教育改革に関心を持っている層である。したがって、質問7のような項目についてはどうしてもバイアスを避けることができない。しかし、それを含んだ上で、こうした教員と学生との間の認識のずれがなぜ生じるのかが教員の間で議論され、それを埋める努力が広がることが期待される。

(3) 質問8「授業の中で情報化を利用した工夫を何かなさっていますか。」への回答

質問8の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

1. 授業に関するホームページを開いている	17.6%
2. 教材をデジタル化し、教室のパソコンを利用して視覚化している	23.2%
3. 質問や相談をe-mailでも受け付けるようにしている	44.9%
4. 学生のレポートをデジタル情報で受け付け、ホームページに載せている	7.2%
5. 学生がホームページ上で自由に意見交換できるようにしている	10.6%

回答を寄せた教員の約4割強がe-mailで学生からの質問や相談を受け付けると回答しており、また約4分の1の教員が教材をデジタル化するなどの工夫をしている。しかし、回答者が全体として教育改革に関心を持っている層であることが推定されるため、この割合が教員全体を反映しているとは必ずしもいえない。むしろ重要なことは、教育改革、とりわけ授業改善に熱心にとりくむ教員たちのこうした個人的努力を、大学が組織としてどのようにサポートしているのか、また今後どうサポートしていくべきかが問われることになる。また、こうした教員たちの先進的取り組みを教員集団の中で共有し、さらに発展させる横のネットワークづくりも今後の課題となってくる。

その意味では、こうした教育の「情報化」に向けたサポート体制への提案を、調査項目のSQに加えておくべきであった。この点は今後の課題である。

- (4) 質問9「ゼミをお持ちの先生に伺います。ゼミを運営していく上で何か個人的に工夫なさっていることはありますか。」への回答

質問9の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1. できるだけ研究室を訪ねるように指導している | 68.8% |
| 2. 学生同士で教えあうなど、共同学習を促すようにしている | 74.2% |
| 3. ゼミの行事（合宿，コンパなど）をできるだけ頻繁に行うようにしている | 56.7% |
| 4. ゼミ中心の研究会などを組織している | 24.8% |

- (5) 質問10「ゼミに限らず、学生の自主性を促す工夫を何かなさっていますか」への回答

質問10の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1. 学生の発言の機会をできるだけつくるようにしている | 81.3% |
| 2. 司会や記録を任せるなど、学生中心の授業運営をしている | 45.5% |
| 3. 学生に課題を与え、自主的に調べるように促している | 87.8% |

質問9からは、ゼミを担当している教員の6割以上が、研究室での個別指導を行う、学生同士の共同学習を促す、ゼミ行事を行う等の工夫をしており、演習という共同学習の利点を大学教育に反映させる努力を試みていることがわかる。

また質問10からは、ゼミに限らず、学生の自主性を促すために発言の機会や課題を与えている教員も8割以上、司会や記録など授業運営を学生に任せる試みをしている教員も4割から5割にのぼっていることがわかる。

これらのことから、教員の多くは、学生を自主的で協同的な学習者に育てるための授業を心がけていることがわかるが、一方でこうしたねらいにはさまざまな困難が伴っていることも指摘されている。たとえば、自由記述回答のなかには、「ゼミ生の勉強意欲の低さや遅刻・欠席の多さに悩まされている。また、社会性、規範意識のなさも同様」「ゼミが効果的に運営できたら教育成果は格段に高まると思われるが、多忙さと学生の意欲の低さもあり、あまりうまくいっていないのが実態である」「就職時期の早期化によりうまくいかなかった」などの回答もある。

学生の意欲の低下がその通りだとすれば、意欲の低下と、それに拍車をかけるかのように進んでいる就職活動の早期化と長期化は、もっとも充実しているはずの大学後期の教育、とりわけ大学教育の核心ともいべきゼミナールを、内と外の両方から瓦解させつつあるといえないだろうか。

一方、ゼミナールをめぐるこうした事象を学生の側からみるとどうということになるだろうか。われわれが同時期に行った学生対象の意識調査（「学生生活の質調査」）の質問3の回答結果によ

れば、「ゼミでは学生が相互に学びあう協同学習の雰囲気がある」という項目に対する学生の回答は、肯定的回答が30.9%、否定的回答が33.7%と、わずかではあるが否定的回答が上回っている。「卒論やゼミ論の指導教員との関係は充実している」に対する回答も、肯定的回答が20.8%、否定的回答は36.0%と否定的回答が上回っている。さらに「助手やTAなどゼミを支援する人的体制が整っている」にいたっては、肯定的回答が6.7%、否定的回答が54.9%と大幅に否定的回答が上回っている。

これを見る限り、意欲の低下が実態だとしても、それをもたらした背景には、物的および人的サポート体制、そして教員との認識のずれや就職活動など、さまざまな要因が複合的に重なっていることがわかる。

こうした大学後期、とりわけ専攻領域のゼミナールをめぐる状況は、不況の長期化に伴う学生の就職活動の長期化、就職率の低迷などによって、楽観できない状況に陥りつつあるのではないか。

就職活動の困難さが学生自身の自尊感情を傷つけ、そのことが意欲の低下をもたらす場合があることも、さまざまなインタビュー調査から明らかになっている。学生の自尊感情と学習意欲の喚起を視野に入れたサポート体制が、授業のみならず大学教育全体に求められているといえよう。

- (6) 質問11「授業改革をすすめる上で、障害になっていることはどんなことですか。」への回答
質問11の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

1. 学生の人数	73.2%
2. 施設	59.5%
3. 予算	44.8%
4. カリキュラム	46.9%
5. 教員の持ちコマ、委員会などによる多忙化	82.7%

授業改革を進める上での障害として、8割以上の教員があげたのが「多忙化」である。この結果は、調査を待つまでもなかったかもしれない。10年前、20年前に比べて入学試験が多様化しており、高校訪問などの渉外的業務も増えている。また、カリキュラムの改定も頻繁に行われており、授業準備に割くことのできる時間は明らかに減少している。ところが、こうした多忙からくる授業への影響については、学生には理解されにくいし、また多忙を理由に授業をおろそかにするのも本末転倒である。しかし事象としては、この本末転倒が起きているのが現実ではないだろうか。

授業改革の障害として次に回答が多かったのが「学生の人数」である。7割強の教員が学生の人数が多すぎるのが授業改善を阻んでいると見ている。教育というしごととはもともと、学習者の認知や行動領域に「変容」を喚起してこそ成果があがったといえる。そうした「変容」をわれわ

れは「学習」と呼んできたが、大人数の一斉授業方式の授業で、そうした意味での学習を一人一人の学生に保障することは、たとえ授業改革に熱心な教員といえども難しい。

学生対象の意識調査「学生生活の質」質問2の回答結果によれば、「知的興奮を感じる刺激的な講義科目がある」に対する学生の回答では、肯定的回答が32.5%、否定的回答が44.2%と、否定的評価が上回っている。また、「私語を注意するなど、積極的な学習環境づくりをしている」に対する回答では、肯定的回答が25.0%、否定的回答が38.1%と否定的回答が多く、教員の私語対策には学生は厳しい評価をしている。

このように、教員対象調査にみる教員の努力は、必ずしも学生に理解されているとはいえない。しかし、ひとりひとりの教員の力量にその原因を求めるのは、安易であろう。教員の努力が学生の評価に結びつかない、なんらかの背景がそこにあると見る必要があるのではないか。もちろん、このアンケート調査に回答した教員層がどちらかといえば教育改革に関心を寄せる層であることを考慮すれば、教員と学生との間のこのギャップは推論できないことはないが、それでは根源的、全体的な解決につながらない。むしろ、改善の方策は、教員の個人的努力を超えた教育条件の整備と集団的力量形成を促す組織的改善に求めるべきではないだろうか。

- (7) 質問12「外国語教育科目、スポーツ健康科目については、リソースセンターとし、「外国語教育センター」「スポーツ健康科学センター」などを設置し、そこに教材や機器、職員を配置することで、教員や学生の支援にあたるという方法もありますが、それについてはどのようにお考えになりますか。」への回答

質問12の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

1. 設置してほしい 63.9%

回答者の6割強が上記のようなかたちのリソースセンターを求めていることがわかる。大学における外国語教育およびスポーツ健康教育については、最近セルフアクセス型のリソースセンターを用意する大学が増加する傾向にある。これらの科目はもともと、ある程度の学習経験が学生にあり、施設・設備、カリキュラム、教材、コンサルティング等が提供されれば、コース外の自学自習によって学習は効果的にかつ継続的に行われる。そこで、週に1度の授業では多くの学習効果を期待できない分、それを人的・物的にサポートする体制が求められてきた。

今後はこうした全学的教育のサポート体制を施設・設備面でどのように充実させていくか、具体化することが必要であろう。

4 - 4 教員の大学コミュニティ (組織・施設) 観

- (1) 質問13 「学生に対するインタビュー調査の結果によれば、クラス制、担任制の導入を望む声もありますが、あなたはそれについてどう思いますか。」

質問13の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1. これからの学生には必要かもしれないので、導入したい | 46.1% |
| 2. 学科の規模によって事情が異なるので、なんともいえない | 39.8% |
| 3. 大学にはクラス制度は必要ない | 31.5% |

クラス制、担任制を「導入したい」と望む教員は半数以下、また「なんともいえない」と判断を保留するのは約4割、「必要ない」が3割強である。全体としてはまだまだ懐疑的といってよい。クラス・担任制度は、文学部の一部の学科ですでに採用されている。きめ細かな指導と学生間の交流が促進されることから、他の大学等でも採用するところがあるが、大学生の質的变化に伴って、大学教育とはどうあるべきかがまさに問われているといえよう。

- (2) 質問14 「現在の大学運営の意思決定に、あなた自身がかかわっていると思いますか。また、そのことについて、今後どのようにしたいですか。」

質問14の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|------------------------------------------------|-------|
| 1. 大学の意思決定にはほとんど関われないので、あきらめている | 35.2% |
| 2. 大学の意思決定に関わる部分は少ないが、意見は言っている | 54.2% |
| 3. 大学の意思決定の大部分は教授会にあるのだから、教員がもっと積極的に意見をいうべきである | 65.9% |
| 4. 大学の意思決定における法人の権限は大きいので、法人改革を進めるべきだ | 73.4% |

大学の意思決定にかかわる教員の意識は、「あきらめている」のは約35%、「意見は言っている」が約54%、「もっと意見をいうべき」は約66%、「法人改革を進めるべき」が約73%と、意思決定にかかわる改善要求は決して低くない。

教育の条件整備のためにも、教員は「もっと積極的に意見をいうべき」だが、規模が大きくなればなるほど個人の意見は反映されにくいと、法人改革を進めるべき」という意見が多くの賛同を得るのであろう。

しかし、これは教員自身の手では改革は進まないという無力感の裏返しでもあり、「あきらめている」と答えた教員が35%いるという事実と考え合わせてみたとき、こうした無力感を生み出している背景を追究する必要がある。

- (3) 質問15「大学というコミュニティにおける学生の役割は、現在は消費者のような位置づけにあります。このことについてどのようにお考えになりますか。」

質問15の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 1. 学生の位置づけは現在のままでよい | 20.9% |
| 2. 学生をコミュニティの一員と位置づけ、発言の機会を与えるべきだ | 67.0% |
| 3. 学生を重要な構成員と考え、もっと透明性を高めるべきだ | 58.7% |

回答者のうち、「現在のままでよい」と答えたのは20%強に過ぎず、6割弱は「学生を重要な構成員と考え、透明性を高めるべき」、7割弱は「学生をコミュニティの一員と位置づけ、発言の機会を与えるべき」と答えている。

これからの大学コミュニティにおける意思決定に学生の意見をどのように反映させるか、またどのように情報を開示するかが論点となるだろう。またその場合、学生に情報を開示した上で大学づくりへの参加を求めることが、学生の成長・発達を促す大きな契機になるという認識を大学教職員が共有することが重要であろう。

- (4) 質問16. これまでのアンケート結果によれば、学生の相談窓口である教務課、就職課、学生課などに対する学生の評価は厳しいようです。具体的な改善提案があったらお聞かせ下さい

質問16はすべて自由記述回答のため、ここでは省略し、調査報告書『学生生活の質と大学満足度の研究』に譲る。

4 - 5 教員の力量形成の実態と期待する条件整備

- (1) 質問17. 「教員の職場環境や労働時間は年々厳しさを増しているように思いますが、下記の項目についてどうお感じになっていますか。」への回答

質問17の各項目に肯定的な回答をした回答者の割合は、次の通りである。

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1. あまりにも多忙で、授業の準備や研究を十分にできない | 83.8% |
| 2. 多忙が教員同士の交流や人間関係づくりの障害になっていると感じる | 63.5% |
| 3. 大学での問題について率直に話し合える同僚がいる | 69.7% |
| 4. 学部・学科の問題は、オープンに話し合われていると思う | 52.8% |
| 5. このたびの教学改革のひずみがいりいろなところに現れていると思う | 56.3% |
| 6. 東洋大学の職場環境、労働条件はいいほうだと思う | 33.9% |

7. 現在の所属学部・学科の運営体制に特に不満はない

27.4%

これらの項目は、教員が力量を形成し、それを発揮できる環境が準備されているか、集団的力量形成の機会が保障されているか、また自律的教育組織としての教員集団に協同的關係があるか、などを問うための質問である。

上記によれば、「多忙で授業の準備や研究を十分にできない」と答えた教員は全体の8割以上に及び、「多忙が教員同士の交流や人間関係づくりの障害になっている」と答えた教員も6割強に及んでいる。また「教学改革のひずみがいろいろなところに現れていると思う」と答えた教員も半数を超え、「所属学部・学科の運営体制にとくに不満はない」と答えた教員も3割に満たない。しかし一方で「率直に話し合える同僚がいる」と答えた教員も約7割、「学部・学科の問題がオープンに話し合われていると思う」と答えた教員も、半数を超えている。このことから、日常的問題に関してはある程度協同的關係が成立しているものの、授業改善や大学改革に結びつくような組織改善にはいたっていないとの不満が教員の多くに潜んでいるのではないかと推測される。

教員自身の力量形成を単に教員個人の努力の結果とみなせば、教員間の格差を是認し、放置するだけでなく、教員間の協同的關係が生まれず、結局は組織全体の改革には結びつかない。教員の力量形成、力量発揮のためにも、また教育組織としての教員集団の自律的改革のためにも、教員の教育条件、研究条件の整備が大学には求められている。

4 - 6 大学教育改革に向けた教員の提案

- (1) 質問18 「以上の質問を踏まえて、学生の大学満足度を高め、学習を中心とした達成感を高める方法について、アイデアや、実施中の事柄がありましたらお聞かせ下さい。」への回答

自由記述回答のため、紙幅の都合ですべてをここに列挙するのは難しいが、主なものをいくつか下記にあげておこう。詳細は調査報告書『学生生活の質と大学満足度の研究』に譲ることとする。

「学部の段階では、学問体系から離れても学生の実際の関心に沿うような授業をすべきである。そしてつねに学生からの反応を確かめて、どの程度効果が上がっているかを自己申告すべきである」

「満足度よりは達成感を重視する改革を強く望みます。卒業した学生が、大学院はもちろん、仕事上の相談に来校するのは何よりの喜びです。生涯かわり、学んでいける大学であってほしいと望みます。」

- (2) 質問19 「法人・理事がなすべきことで、緊急な課題とお考えになることがありましたらお聞かせ下さい」への回答

これについても目だった意見のみあげ、詳細は前述の調査報告書に掲げることとする。

「教務課職員や図書館職員などは、教育・研究の有力な援軍なので人員を減らしたりしないこと。この職種の人が大学運営を円滑にしている功績を正当に評価すべきである」

このように、大学改革に向けた教員の提案は、自らの改革をも含めて前向きである。もちろん、前述のように、この調査に回答を寄せた教員がどちらかといえば大学教育改革に関心を寄せる層であることを考慮すれば当然のことではあるが、こうした教員たちの教育改革に向けた日常の取り組みは、じつはあまり知られていない。集団的力量形成の場もネットワークもないからであろうか。

今後、教員主体の教育改革、とりわけ授業改革を進めようとするならば、今回ここで明らかになったような教員の日常の取り組みから大学教育観まで、集団的に議論し、交流し、その力量を高めていくことを促進するための組織や施設・設備が求められてくるであろう。

5 今後の課題

調査を終えてみての課題をいくつか整理しておきたい。

第1は、調査に回答を寄せてくれた教員層を分析する必要があったということである。今回のデータには、教育改革という意味ではかなりプラスのバイアスが働いている。そもそも、教育改革に関心を寄せる教員とそうでない教員との違いは何なのか。何が教員を授業改善に向けたエネルギーとなっているのか。それが解明されてはじめて、今回調査対象とした「条件整備」が意味をもってくる。

第2は、教員力量形成のプロセスを明らかにする必要があるということである。大学教員はどのようにして教授能力を獲得し、その力量を伸ばしていくのか。それを明らかにすることが、集団的力量形成の条件を明らかにし、その機会を保障する上での前提である。初等・中等教育における教員の力量形成については、これまでも多くの先行研究があるものの、高等教育の領域においてはまだその研究は緒についたばかりである。たとえば、京都大学高等教育システム開発センター等、いくつかの国立大学がすでに先進的取り組みを始めている。今後は、そうした先行研究に学びながら、大学教員の力量形成にかかわる調査研究をまさに協同的に進めていくことが重要であろう。

1 本研究は、旧社会学研究所プロジェクト「学生生活の質と大学満足度の研究」の一部である。

2 東洋大学文学部教授 旧社会学研究所プロジェクトメンバー

3 東洋大学人間科学総合研究所紀要 創刊号に「フォーカス・グループ・インタビューによる学生生活の質（Quality of Student Life : QoS）の研究」として印刷中である。

資料1 「教員の大学改革・教育改革に対する意識調査」調査票

教員の大学改革・教育改革に対する意識調査

この調査は、「学生生活の質と大学満足度の研究」の一環として、先生方の大学改革・大学教育に対する改革の方向性や改善提案についてご意見を伺おうとする調査です。

質問の枠組みとしては、
・教員の現状認識と大学教育改革の方向性、
・教員の学生観、
・教員の大学授業に対する意識と授業改善の工夫、
・教員の大学コミュニティ(組織・施設)観、
・教員の職場環境への不満や要望の5つです。

本プロジェクトは社会学研究所の予算を得て、平成12年度に卒業生を目前にした4年生を対象に「学生生活を振り返って、後輩に言い残すこと」に関するグループ・インタビュー、平成12年度当初に、新入生を対象に「入学学科への満足度や学生生活への期待」に関するグループ・インタビューを実施しました。本年度は、4年生を対象に「学生生活の質(Quolity of Student Life)調査」を実施しています。

学生の意識と併せて、教育のもう一方の主体である先生方の考え方をお教え戴きたく、何かとあわただしい年末に、調査への協力をお願いするのは心苦しいのですが、どうぞ宜しくお願い致します。

ご質問、ご意見がありましたら、下記のプロジェクトメンバーにお尋ね下さい。

東洋大学 社会学研究所プロジェクト2 「学生生活の質と大学満足度の研究」

社会学部 杉山憲司

社会学部 小林正夫

社会学部 鈴木哲郎

文学部 斎藤里美

回答方法

1. 程度を聞いている問題には、選択肢の中から、あなたの考えに一番当てはまる項目を1つ選び、その番号に○印をつけて下さい。
2. 自由記述を求める項目には、なるべく詳しく、自由にご記入下さい。
3. 質問は調査をお願いした先生か調査補助者にお聞き下さい。

・教員の現状認識と大学教育改革の方向性

1. 現在の大学は、18歳人口の減少、学生の学力低下、大学のユニバーサル化（大学進学率が50%に近づくことをこう呼ぶ）など、様々な課題を抱えています。こうした中で、今後東洋大学は、積極的に教育改革を進めるべきだと思いますか。

全く	あまり	どちら	やや	非常に
そう	そう	でも	そう	そう
思わない	思わない	ない	思う	思う

- 1) 改革の方向を議論し、できるだけ早く進めるべきだ 1 2 3 4 5
 2) 教育改革はあせらず慎重に行うべきだ 1 2 3 4 5
 3) 教育改革にはあまり関心がない 1 2 3 4 5
 4) その他（具体的に ） ... 1 2 3 4 5

2. もしも今後東洋大学が教育改革を推進していくとしたら、あなたはどのような改革を優先していくべきだと考えますか。

1) カリキュラム改革を優先すべきだ 1 2 3 4 5
 1 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

2) 入試改革を優先すべきだ 1 2 3 4 5
 2 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

3) 授業改革（授業方法の改善・工夫など）を優先すべきだ ... 1 2 3 4 5
 3 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

4) 進路選択支援（資格取得、外国語検定試験など）体制の改革を優先すべきだ
 1 2 3 4 5
 4 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

5) 学生生活支援（学生相談、奨学金、サークル活動など）体制の改革を優先すべきだ
 1 2 3 4 5
 5 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

6) 大学の個性化を優先すべきだ 1 2 3 4 5
 6 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

7) その他（具体的に ） ... 1 2 3 4 5
 7 - SQ. どのように改善すべきだとお考えですか。（具体的にお書き下さい：
 ）

・教員の学生観

3. 東洋大学の学生について日常感じていることをお答えください。

	全く そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら でも ない	やや そう 思う	非常に そう 思う
1) 積極的に質問・発言するなど学ぶ意欲の高い学生が多い...	1	2	3	4	5
2) 私語や携帯電話など学生の受講マナーはよい.....	1	2	3	4	5
3) ゼミや講義で、学生の問題意識の高さを感じる.....	1	2	3	4	5
4) 積極的に研究室を訪ねてくる学生が多い.....	1	2	3	4	5
5) 学生は概してまじめで誠実である.....	1	2	3	4	5
6) 出席は学生の権利であって義務ではないと思う.....	1	2	3	4	5
7) その他(具体的に) ...	1	2	3	4	5

4. あなたは、学生にとってどのような存在でありたいと思いますか。

1) 専門的な知識や技術を身に付ける上でのおよき指導者.....	1	2	3	4	5
2) 今後学びつづける上で必要な幅広い知識と学び方の伝達者	1	2	3	4	5
3) 学問のみならず、人生のおよき相談者.....	1	2	3	4	5
4) その他(具体的に)	1	2	3	4	5

5. 大学は、学生の課外活動(サークル活動やボランティア、学園祭など)や友人関係に関してどのような支援を行うことが望ましいと思いますか。

1) 場所や機会の提供は行うが、あとは学生の自主性に任せるべきだ.....	1	2	3	4	5
2) 場所や機会の提供のみならず、もっとひろく組織化し、広報活動を行うべきだ.....	1	2	3	4	5

2 - S Q . た と え ば 、 ど の よ う な 改 善 が 考 え ら れ ま す か 。 (具 体 的 に お 書 き 下 さ い :

)

・教員の大学授業に対する意識と授業改善の工夫

大学基準協会による相互評価がよいよ始まり、大学における授業改善にもさまざまな工夫が求められるようになってきました。全ての科目について学生による授業評価を実施している大学もあります。

6. あなたは、学生による授業評価を実施することに対してどのように考えますか。ただし、ここで言う「授業評価」は、教員の人事考課などに利用されないことを前提とします。

全く あまり どちら やや 非常に
 そう そう でも そう そう
 思わない 思わない ない 思う 思う

1) 学生による授業評価を積極的に実施する方向で努力すべきだ
 1 2 3 4 5

1 - SQ . その理由をお聞かせください。(具体的に書き下さい：
)

2) 学生による授業評価を行うか否かは、教員の自主的判断に任せるべきだ
 1 2 3 4 5

2 - SQ . その理由をお聞かせください。(具体的に書き下さい：
)

3) 学生による授業評価に大きな意義があるとは感じられない 1 2 3 4 5

3 - SQ . その理由をお聞かせください。(具体的に書き下さい：
)

4) 授業評価は学生におもねることになり、かえって学ぶ謙虚さを損なう
 1 2 3 4 5

4 - SQ . 具体的にどのような心配がありますか。(具体的に書き下さい：
)

7 . 多人数授業とそれを補う工夫について意見をお聞かせ下さい

1) 講義やゼミなどで、学生の人数が多すぎるために、授業の進行の障害になっていると感じる
 ことが多い..... 1 2 3 4 5

2) 質問の時間などを設けて、学生の理解を補うようにしている ... 1 2 3 4 5

3) 小グループに分けてディスカッションさせたり、発表させたりしている
 1 2 3 4 5

4) 質問・感想用紙をくばって、自由に書かせるようにしている ... 1 2 3 4 5

5) 質問のある学生には、個別に研究室に来るよう指導している ... 1 2 3 4 5

6) できるだけ補助資料を配布するようにしている 1 2 3 4 5

7) OHPやビデオなどの視聴覚教材を利用し、理解を助けるようにしている
 1 2 3 4 5

8) ときどきレポートや課題を課し、理解度をチェックするようにしている
 1 2 3 4 5

9) その他(具体的に) 1 2 3 4 5

8 . 授業の中で情報化を利用した工夫を何かなさっていますか。

1) 授業に関するホームページを開いている 1 2 3 4 5

全く あまり どちら やや 非常に
 そう そう でも そう そう
 思わない 思わない ない 思う 思う

- 2) 教材をデジタル化し、パソコンを利用して視覚化している 1 2 3 4 5
 3) 質問や相談をE-mailでも受け付けるようにしている 1 2 3 4 5
 4) レポートをデジタル情報で受け付けホームページに載せている 1 2 3 4 5
 5) 学生がホームページ上で自由に意見交換できるようにしている ... 1 2 3 4 5
 6) その他(具体的に) 1 2 3 4 5

9. ゼミをお持ちの先生に伺います。ゼミを運営していく上で何か個人的に工夫なさっていることはありますか。

- 1) できるだけ研究室を訪ねるように指導している 1 2 3 4 5
 2) 学生同士で教えあうなど、共同学習を促すようにしている
 1 2 3 4 5
 3) ゼミの行事(合宿, コンパなど)をできるだけ頻繁に行うようにしている
 1 2 3 4 5
 4) ゼミ中心の研究会などを組織している 1 2 3 4 5
 5) その他(具体的に) 1 2 3 4 5

10. ゼミに限らず、学生の自主性を促す工夫を何かなさっていますか。

- 1) 学生の発言の機会をできるだけつくるようにしている 1 2 3 4 5
 2) 司会や記録を任せるなど、学生中心の授業運営をしている 1 2 3 4 5
 3) 学生に課題を与え、自主的に調べるように促している 1 2 3 4 5
 4) その他(具体的に) 1 2 3 4 5

11. 授業改革をすすめる上で、障害になっていることはどんなことですか。

- 1) 学生の人数 1 2 3 4 5
 2) 施設 1 2 3 4 5
 3) 予算 1 2 3 4 5
 4) カリキュラム 1 2 3 4 5
 5) 教員の持ちコマ、委員会などによる多忙化 1 2 3 4 5
 6) その他(具体的に) 1 2 3 4 5

12. 外国語教育科目、スポーツ健康科目については、リソースセンターとして「外国語教育センター」「スポーツ健康科学センター」などを設置し、そこに教材や機器、職員を配置することで、学生の自主的学習の支援にあたるという方法もありますが、それについてはどのようにお考えになりますか。

16. これまでのアンケート結果によれば、学生の相談窓口である教務課、就職課、学生課などに対する学生の評価は厳しいようです。(具体的な改善提案があったらお聞かせ下さい:

)

. 教員の職場環境への不満や要望

17. 教員の職場環境や労働時間は年々厳しさを増しているように思いますが、下記の項目についてどうお感じになっていますか。

	全く そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら でも ない	やや そう 思う	非常に そう 思う
1) あまりにも多忙で、授業の準備や研究を十分にできない...	1 2 3 4 5
2) 多忙が教員同士の交流や人間関係づくりの障害になっている ...	1 2 3 4 5
3) 大学での問題について率直に話し合える同僚がいる	1 2 3 4 5
4) 学部・学科の問題は、オープンに話し合われている	1 2 3 4 5
5) このたびの教学改革のひずみがいろいろなところに現れている	1 2 3 4 5
6) 本学の職場環境、労働条件はいいほうだと思う	1 2 3 4 5
7) 現在の所属学部・学科の運営体制に特に不満はない	1 2 3 4 5
8) その他(具体的に)... 1 2 3 4 5

. その他

18. 以上の質問を踏まえて、学生の大学満足度を高め、学習を中心とした達成感を高める方法について、アイデアや、実施中の事柄がありましたらお聞かせ下さい。

19. 法人・理事がなすべきことで、緊急な課題とお考えになることがありましたらお聞かせ下さい。

20. 最後に、この調査そのものに対するご意見、質問がありましたらご記入下さい。今後の研究を
めて行く上で役立たせていただきます。

これで終わりです。貴重な時間を割き、調査にご協力いただき有り難うございました。

【Abstract】

A Study of Research about Quality of Student Life and Professors' Attitudes towards Faculty Development at Toyo University

SUGIYAMA Kenji
SAITO Satomi
SUZUKI Tetsuro
KOBAYASHI Masao

This study includes two phases. The first phase assesses the quality of student life and analyzes its relation with the feeling of satisfaction of campus life. The second phase analyzes professors' attitudes towards faculty development.

We carried out research into Quality of Student Life at Toyo University. The conclusions of the research are as follows:

- 1 . In the learning domain, interactive communication, learner -centered class, feedback for students are keys for improvement.
- 2 . In the club activities domain, students' opinions about university club activities are both positive and negative.
- 3 . In the inter-personal domain, the university is a place to learn diverse value systems, varied viewpoints, importance of trust and cooperation. There is a need to work to raise self-esteem among students. Therefore, it is necessary for the university to provide support for the nurturing of inter-personal relations.
- 4 . In the university community domain, students need more opportunities to participate in extra-curricular activities. It is the role of a university to provide such opportunities.

We carried out research into professors' attitudes towards faculty development at Toyo University. The conclusions of the research are as follows:

- 1 . Professors' attitudes toward their students, their mission, and faculty development are relatively positive, but their attitudes and performance are not appreciated by the students.
- 2 . There are some difficulties in realizing faculty development: professors have too many students in each class and heavy workloads.
- 3 . Professors have the basis to individually work to improve their teaching skills, but due to lack of opportunities to cooperate, faculty development is not progressing.